

曹洞宗海晏山宛陵寺季刊紙
第8号／平成19年夏

は す の は

平成19年7月8日

発行人 浦辺世紀

発行所 海晏山宛陵寺伝道部 〒859-4527 松浦市今福町仏坂免958 宛陵寺内
電話；0956-74-0139 FAX；0956-74-1170 e-mail；cent@fine.ocn.ne.jp
環境；iMac2.16GHz MacOS10.4.10 Adobe InDesign CS3 EPSON LP-S5500

◎ご家族皆様でお読み下さい。



把針いただいた二十五条衣を身につけて（19/3/21 春彼岸中日）

龍水



◆現代の仏教には多くの宗派がある。律宗、華嚴宗、法相宗、天台宗、真言宗、融通念仏宗、浄土宗、浄土真宗、時宗、臨済宗、曹洞宗、日蓮宗、黄檗宗。以上は日本仏教十三宗という。中国大陸から伝えられた仏教だが、融通念仏宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗は日本で生まれた◆宗派によって、僧侶の姿も、お経も、祭り方も違う。しかしどれが良いとか悪いとかではない。すべては「入り口」。中に入ると皆同じものを拝む。そう、自分の心を拝む◆仏像も、位牌も、人間もみんな鏡となっている。この拝み合う姿が「仏道」ではないか。ゆえに、拝まぬ人には、神も仏も無い。（世）

「仏教伝来から思うこと」

仏教は、インドに生まれ、中国で育ち、日本で開花したといわれます。

日本に仏教が伝わったのは諸説ある中、日本書紀によると西暦五五二年、古墳時代に百濟（朝鮮半島）からで



した。インドから中国に伝わってから五百年もの月日が流れたあとのことでした。その後仏教が国教となったのは、飛鳥時代、聖徳太子の政権になってからです。日本に伝えられた初期の宗派は、律宗、華嚴宗、法相宗です。

その後、奈良時代や、永きにわたる平安時代は国家権力とも結びつき、おおいに栄えましたが、民衆とは無縁の存在だったようです。ちなみに松浦党の始祖、源久公の時代は平安時代後期です。

そして武士の台頭によって鎌倉仏教という新しい時代を迎えることとなりました。平安時代には、最澄の天台宗と空海の真言宗との二大仏教に分かれていましたが、鎌倉時代になると、法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、栄西の臨済宗、そして道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗、隠元の黄檗宗などが相次いで誕生し、伝えられ、現代に受け継がれています。室町時代になって世俗文化の中で、仏教はやつと民衆の中に受け入れられるようになりました。

ところが、安土桃山時代に移ると、寺院は支配者の統制と攻撃を受け、織田信長は大寺院の無力化を図ろうと、比叡山や高野山、本願寺などを攻め立て、抵抗する寺でらをことごとく焼き払ったそう

です。豊臣秀吉はさらに巧妙に、攻めたり保護したりを繰り返しながら、寺の弱体化を図りました。

徳川時代になると、すべての仏教寺院は封建制度の中に組み入れられて、幕府の支配下に置かれることになりました。民衆に対しては「宗旨人別帖」をつくり、すべての個人は、必ずいずれかの寺院に属することを定めました。ここに「檀家制度」ができたのです。明治時代になると「神仏分離令」が發布され、その勢いは「廃仏毀釈運動」に発展し、各地の寺院で仏像、石仏が首を落とされました。大正から昭和にかけては、軍国主義に押し流されつつ、国家の勝利と鎮護のための祈祷や、家制度の存続のための先祖供養に終始せざるをえなくなったのでしょうか。

戦後、敗戦の虚脱状態の中から、多くの新興宗教が生まれ、既存の法事仏教よりも、心の支えの宗教として受け留められました。

既存の仏教教団は、そうした事態に至っても、檀家制度の上で安住し、積極的な活動をしませんでした。いよいよ、農業改革などによる経済的な打撃と、人口の都市集中による檀家の減少にともない、田舎の寺院ではやつと本来の「布教」に立ち返りつつあります。それでもまだ、葬儀や法事などが主体であり、なかなか人々の心の救済に向かう熱意は、新宗教に比べて少ないと思います。

宛陵寺にあっても、事情は同様で、関わりのある葬儀・法事でしか、寺に訪れない方もかなりおられます。住職の不徳と、努力の足りないことを反省させられますし、寺院の存在意義も根底から見直さなければならぬ時代が、すぐそこまで来ていると感じるのは、わたしだけでしょうか。

(世)

「清女会の活動」

―二十五条衣の糞掃衣（ふんぞうえ）完成―

皆様から、お寄せ頂いた古布と、把針をして頂いたおかげで、めでたく出来上がり（表紙の写真）、お袈裟として掛けさせて頂く事ができました。今の世の中お金さえあれば何でも買える時代ですが、この糞掃衣ばかりは、買うことが出来ません。最高級の宝物です。宛陵寺の伝衣として、大切にさせて頂きます。

どうもありがとうございました。

―奉仕作業後のお茶会―

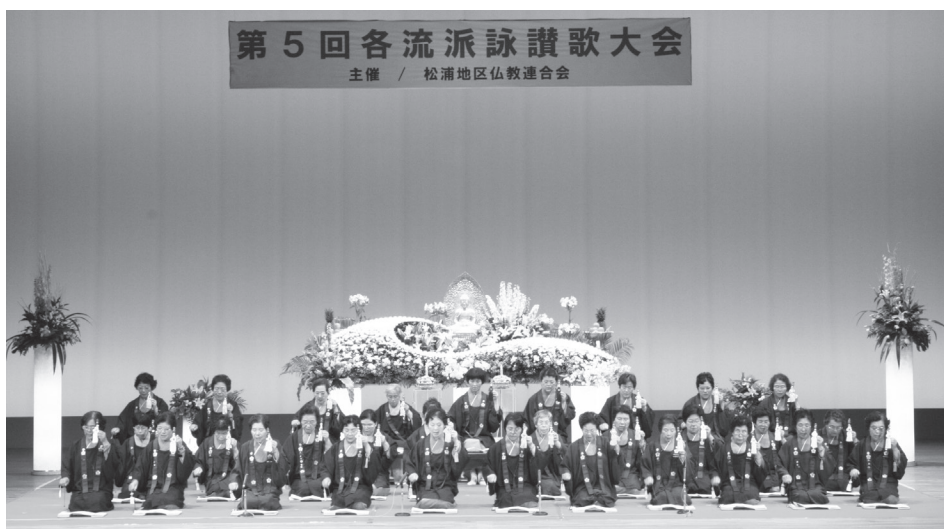


春の彼岸の前に、境内と寺内をきれいにさせて頂きました。あつという間に見違えるほどみごとに！清女会の方の一致団結ぶりは素晴らしいものです。その後、お茶を飲みながら、昔話に花が咲きました。「清女会」の名付け親は、松浦家のお殿様だったそうです。毎月の八日講の法要は、百年前から続いている伝統行持。お斎の味も昔々から受け継がれています。お寺が寺子屋として昔から慕われたように、現代もそうあって欲しいと願っています。清女会のですますの発展を祈念いたします。

第五回「各流派詠讃歌大会」が行われました

七月六日、松浦文化会館ゆめホールに於いて、松浦地区仏教連合会主催での、「各流派詠讃歌大会」が開催されました。宛陵寺からも梅花講の皆さん四十名が参加されました。この大会は四年に一度、この時期に行われています。今年には市内と田平町から十三ヶ寺が参加しました。曹洞宗は「梅花流」ですが、真言宗「金剛流」、浄土宗「吉水流」、臨済宗「花園流」などと各宗派によって流派が異なり、曲はもちろん、作法も服装も違います。しかし、仏の教えをリズムに乗せて、荘厳に唱える、その御心は変わりません。

宛陵寺の皆さんは、「宛陵寺御詠歌」を二題、唱えられました。



仏事の深意・・・改めて、「通夜」

最近、勘違いされている。「宛陵寺の和尚は、お通夜はせんでもいいと言っている」と噂されているらしい。わたしは「通夜不要」とはけっして言っておらぬ。通夜はかけがえのない大切な時間である。今、黄泉に一步を進まんとする方との、最後の一夜である。

息の還りを待ちながらも、その方の一生涯をふり返り、最後は明らめ、冥福を祈る。いくら僧侶でも踏み込んでいけない、死者と肉親の、生と死の、命の引き継ぎの時と、思う。そのところを他人ができるのか・・・？ 三十分や、一時間でできるのか・・・？

この一夜は、遺族にとつては、そう思っ過ぎておいておいでになる時間と思って疑わぬ。「形や体裁だけの儀式はやめませんか？」わたしは、そのところを言っっている・・・それでも三十分のお経が有難いと言って戴けるのはもったいないが・・・その邪見から離れたところに真理がある気がしてならない。

世の中、変わってしまったものだ。(世)

編集後記

梅雨時には雨がたくさん降り、夏は暑く、冬は寒く。

朝起きて、夜眠る。子ども

は賑やかに、歳をとったらわきまえて。おんなは情深く、男は逞しく。いつの時にも、機嫌良く、口はゆるめすぎず・・・。

歳を取るほどに逆さまになりやすいな。(世)



庫裡裏側の土手の工事が行われています。マツコン建設さんと、吉永造園さんに発注しています。境界の地主さん、護持会の役員さん、善福寺さん、そのほか様々

な方々にご迷惑をおかけしておりますが、御陰様で順調に進んでおります。今後とも宜しくお願い致します。

